修士論文（要旨）
2018 年 1 月

外国人就労者の多言語使用状況からみるアイデンティティに関する考察
－SCAT を用いた質的分析の試み－

指導　宮副ウォン　裕子　教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
216J3003
許　爽爽

Master's Thesis(Abstract)
January 2018

A Study on the Identity as Seen in Multilingual Language Use among Foreign Workers: A Qualitative Analysis Using SCAT

SHUANGSHUANG XU
216J3003
Master's Program in Japanese Language Education
Graduate School of Language Education
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Yuko Miyazoe-Wong

目次

第１章 はじめに **1**
1.1　研究背景 1
1.2　研究目的 2
1.3　本研究の構成 3
第２章　先行研究 **4**
2.1　日本語使用の問題に関する先行研究 4
2.2　言語とアイデンティティに関する先行研究 4
2.3　異文化接触とアイデンティティ関する先行研究 5
2.4　言語学習とアイデンティティに関する先行研究 6
2.5　多言語・多文化環境における言語選択とアイデンティティに関する先行研究 7
2.6　従来の研究の問題点 7
2.1　実践共同体におけるアイデンティティを捉える 8
第２章　複数言語使用者に関する事例調査 **10**
3.1　調査協力者のプロフィール 10
3.2　複数言語使用者に関するデータ 11
3.3　分析の方法 12
第４章　事例研究の結果と考察 **15**
4.1　スーさんのケース **15**
4.1.1　言語使用意識の変化 15
4.1.2　自国で形成されたアイデンティティを保持し、変化しなかった 18
4.1.3　複数言語使用によるアイデンティティの再構築 19
4.1.4　日本と自国に影響されているアイデンティティ 19
4.1.4　確認できなかったアイデンティティ 20
4.2　チョリさんのケース **20**
4.2.1　言語使用意識の変化 21
4.2.2　自国で形成されたアイデンティティを保持し、変化しなかった 24
4.2.3　複数言語使用によるアイデンティティの再構築 25
4.2.4　日本と自国に影響されているアイデンティティ 26
4.2.4　確認できなかったアイデンティティ 26
4.3　ニジさんのケース **27**
4.3.1　言語使用意識の変化 27
4.3.2　自国で形成されたアイデンティティを保持し、変化しなかった 30
4.3.3　複数言語使用によるアイデンティティの再構築 30
4.4.4　日本と自国に影響されているアイデンティティ 32
4.5.4　確認できなかったアイデンティティ 32
4.4　モディさんのケース **33**
4.4.1　言語使用意識の変化 33
4.4.2　自国で形成されたアイデンティティを保持し、変化しなかった 36
4.4.3　複数言語使用によるアイデンティティの再構築 36

4.4.4　日本と自国に影響されているアイデンティティ.....38
4.4.4　確認できなかったアイデンティティ.....38
第５章　総合的考察..... 39
5.1　複数言語能力保持者としての言語選択.....40
5.2　複数言語能力保持者としての言語管理.....42
5.3　複数言語能力保持者としてのアイデンティティ管理.....43
第６章　まとめと今後の課題..... 46

謝辞
参考文献
資料

＜資料１　調査同意書＞
＜資料２　調査のデータ（抜粋）＞

空間、言語、文化の境界を越えて移動することが常態化しつつある状況の今日、個人が一つ以上の言語を使用することが珍しくなくなった。このような多言語使用が増加する現代では、複数言語使用者が生活や職業上の様々な共同体に参加しており、彼らの言語にかかわる行動を多角的視点から捉えなおし、明らかにすることが急務である。個人の言語意識とアイデンティティの形成には密接な関係がある。特に、使用言語が複数の言語にわたる場合、その関係性を捉えることはアイデンティティの形成を理解する上で有意義だと考えられる。細川（2011）は、アイデンティティを「個人がさまざまに有している複数の自己の姿であり、それらの自己が必要とする『居場所』感覚のこと」と定義した。それに基づき、本研究では、職業共同体における複数言語使用者を対象に、どのような言語教育をうけたのか、どのような異文化接触を経験したのか、それによりどのような言語観を持つようになったのか、また、職業共同体においては、どのように言語活動をしているのか、例えば、多様な言語使用場面でどのように場面や相手に応じて言語を選択するのかといった言語にかかわる諸要因を考察し、複数の言語を使用することにより、個人のアイデンティティの形成および再構築にどのような影響を与えるのかを論じることを目的とする。

調査は 2014 年から 2017 年 10 月にかけて、3 か国 4 名の協力者を対象に行った。複言語使用者の言語学習と言語使用に関する調査の先行研究である宮副（2016）の調査方法に倣い、協力者に自身の言語学習ヒストリー（LLH : language learning history）、および言語使用ヒストリー（LUH : language using history）を 1500 字程度で記述してもらった。その後、データに基づき、調査協力者それぞれの体験について半構造化インタビューを実施し、その文字化データを SCAT 方法で分析シートに整理した。特に、複数言語の使用に焦点をあて、仕事を含む様々な場面における個人の言語行動の特徴が明確になるようデータを詳細に分析した。

分析結果から、研究課題に対する以下のような結論が得られた。1）言語背景の異なる複数言語使用者は日本社会の様々な場面において、日本語を最優先の選択と考えると同時に、相手とコミュニケーションを行いながら、相手の母語、言語能力などの要素を考慮し、合わせて適切な言語を選ぶような言語選択基準を持っている。また、各場面に応じて 2 つ以上の言語選択基準を採用することがある。2）複数言語使用者は個人の言語管理を幅広く行っているが、日常生活の中で、生じたコミュニケーション問題に留意し、内省し、調整し、新たな言語行為を実施するという言語管理のプロセスの形で管理を行っている。3）複数言語使用者は、職業的変化、地理的移動の変化により、自国で形成されたアイデンティティに変化をもたらす。複数言語の使用意識は彼らのアイデンティティの再構築に大きな影響を与える。また、自身の中で、自己確証、自己内省などのことを行いながら、様々なアイデンティティも持つ自分を作り出し、社会という実践共同体に参加するため、再構築された自分として言語活動を行う。

本研究は、複数言語使用者の経験してきたことが現在のアイデンティティの形成と再構築にどのような影響を与えたかについて考察したが、通時的なものではない。今後、さらに多くのデータを収集し、多角的に探っていくことが必要である。また、日本のような日本語がほぼ唯一の言語社会だけではなく、多くの国、地域の多言語社会には、さらに多くの多言語使用者が存在するので、彼らの多言語使用状況を把握し調査する必要がある。以上のことから、複数言語教育を捉え直し、様々な言語文化において言語文化間の仲介的役割として活躍する複言語複文化能力を持つ国際人を育成するのが教育機関の課題とである

ことが、本稿の調査から得られた示唆だと考える。

参考文献

石田由美子（2006）『多言語状況下における個人言語管理―シンガポール、マレーシア、フィリピンの場合―』桜美林大学大学院博士学位論文

石田由美子（2010）「個人と政策・談話とのつながりを考える ― 個人レベルの言語管理を中心にして ―」『接触場面の変容と言語管理　接触場面の言語管理研究 VOL.8』村岡英裕編著　pp. 25-33

大谷尚（2008）「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案―着手しやすく小規 模データにも適用可能な理論化の手続き ―」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』第 54 巻 第 2 号、pp.27-44.

高民定（2007). 多言語使用者のバラエティと言語管理 2007 年度日本語教育学会春季大会予稿 集 日本語教育学 pp.318-320

金美善（2003）「混じり合う言葉–在日コリアン一世の混用コードについて」『月刊言語 6』 pp.46-52 大修館書店

近藤彩（1998）「ビジネス上の接触場面における問題点の関する研究–外国人ビジネス関係者を対象にして–」『日本語学育』第 98 号、pp. 97–108、日本語教育学会

黄鎮杰（1994). 在日韓国人の言語行動–コード切り替えにみられる言語体系と言語運用 日本学 報 13 pp.45-63 大阪大学文学部日本学研究室

粟飯原志宣（2009）「ビジネス接触場面における日本語母語話者と学習者に生じる問題―海外で日本語を使用する日本語母語話者の視点を探る―」『間谷論』3, pp.49-77

塩入すみ（2006）「留学生のアイデンティティ確立の過程―台湾人短期留学生の事例から―」『京都橘大学研究紀要』第 33 号、pp.113-133.

清ルミ（1995）「上級日本語ビジネスピープルのビジネス・コミュニケーション上の支障点――インタビュー調査から教授内容を探る」『日本語教育』87 号、pp.139-152、日本語教育学会

清ルミ（1998）「外国人社員と日本人社員―日本語によるコミュニケーションを阻むもの―」『異文化 コミュニケーション研究』10、pp.57-73、神田外語大学

西口光一編著（2005）『文化と歴史の中の学習と学習者：日本語教育における社会文化的パースペクティブ』凡人社

細川英雄（2007）「日本語教育学のめざすもの―言語活動環境設計論による教育パラダイム転換とその意味―」『日本語教育』132 号、pp. 79–88　2007 年 1 月

細川英雄（2011）『言語とアイデンティティ』春風社

朴良順（2006). 日本語・韓国語間のバイオリンがリズムとコードスイッチング 韓国人による 日本社会言語学研究 真田真治(監修) 任榮哲(編) pp.183-200 おうふう

宮副ウォン裕子（1997）「香港理工大学の「ビジネスのための日本語」を中心にした連携」『日本語教育』5 月臨時増刊号 VOL.16、pp. 211–222、明治書院

宮副ウォン裕子（2003）「多言語職場の同僚たちは何を伝え合ったか–仕事関連外話題における会話上の交 渉–」『接触場面と日本語教育–ネウストプニーのインパクト–』宮崎里司・ヘレンマリオット 編著 pp. 165–184 明治書院

宮副ウォン裕子（2015）「複数言語使用者の言語の学習と社会化―職業共同体への参

加過程の分析から―」『言語教育研究』第 6 号
山川智子（2010）「ヨーロッパ教育」における「複言語主義」および」「複文化主義」の役割．細川英雄，西山教行（編）『複言語・複文化主義とは何か：ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ』（pp．50-64）くろしお　出版
義永(大平)未央子(2005)「伝達能力を見直す」西口光一(編) 『文化と歴史の中の学習と学習者』凡人社, p.54-78.
ネウストプニー.J.V. (1995). 日本語教育と言語管理 阪大日本語研究 7 pp.67-82.
Erikson, E. H.（1959）. Identity and the Life Cycle. New York International Universities Press（エリクソン，E．H ，小此木啓吾 （編訳）（1973）．自我同一性 誠信書房）
Fotos, S. （1995）. Japanese-English Conversational Codeswitching in Balanced and Limited Proficiency Bilinguals. The Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism, 1, 1−16.
Lave, J. & E. Wenger（1991) Situated learning legitimate peripheral participation. Cambridge University Press. 佐伯胖（訳）（1993）『状況に埋め込まれた学習―正統 的 周辺参加―』産業図書
Murphey, T., Chen, J., & Chen, L.C/. (2004). Learners ‘constructions of identities and imagined communities. Learner’s Stories. Cambridge Universities Press. 83-100.
Thomason, S. G. （2001）. Language Contact. Edinburgh: Edinburgh University Press.
Siegal, M. S. (1994). Looking East: Learning Japanese as a second language in Japan and the interaction of race, gender and social context (Unpublished doctoral dissertation). University of California, Berkeley.